法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

〔能楽〕研究展望(平成6年)

田口, 和夫

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 : 能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
151
(終了ページ / End Page)
165
(発行年 / Year)
1998-05-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020508

研究展望（平成六年）

田口和夫

本来は昨年度紀要に載せるはずの展望だったが、公私ともに多忙となり、一年延期した。ところが状況はあまり変わらず、結果は締め切りに追われる次第となった。繁簡宜しきを得ないのはそのためである。さて、昨年の展望欄では「能楽に関する論文主体の研究書には大冊がなかった」ことが指摘されていたが、本年は打って変わって充実している。どうも研究にはこのような波が認められるようである。

参考とした文献目録は『国文学年鑑　平成6年（1994）』「雑誌紀要単行本論文目録」中世文学の項（至文堂。平8年3月）、『観世』所載、池田英悟・小林責両氏編「能・狂言文献要覧」である。『国文学年鑑』所載分は国文学研究資料館員相田満氏のご協力によってほぼ収集できたが、ここではそのすべてを取り上げるわけにはゆかなかった。

単行本――単著

『未刊謡曲集　続十三』（古典文庫。田中允編。2月。新書判426頁。会員頒布）

〈舞車〉から〈満仲〉までの四十番を収める。異本・改作などがあり、曲数としては十九。世阿弥の〈松浦〉、明和改正〈佐用姫〉なども収める。

『未刊謡曲集　続十四』（6月。464頁、他は同前）

〈皇軍艦〉から〈室山〉までの四十六番。曲数は四十二。いつものことだが、「各曲解題」が充実している。少し冗漫に思えるところもあるが、後世の研究者にとっては、そこが生きた同時代の証言として活用されることになるだろう。

『狂言史の基礎的研究』（関屋俊彦著。A5判365頁。3月。和泉書院。一一三三〇円）

表題に「基礎的」と言う通り、これは近世狂言史に関わる基礎資料を吟味・考証した書である。初めに概説的な「狂言の諸流」を置き、次に本書の主力論文を含む「和泉流狂言史考証」、第三章「大蔵流・鷺流狂言史考証」、第四章「能・狂言史料考証」となる。本書の価値は貴重な新史料を発掘・紹介しているところにあり、そのような意味では、第二章の二「和泉流家系考補遺」、四「山脇和泉元宜をめぐって」において『尚嗣公記』『資勝卿記』などの公卿日記を用いることによって、従来の役者側で作られた二次的資料による伝説を大幅に修正していることが評価されよう。第四章の三「国立公文書館蔵『猿楽者分限短冊』」は『喜多流の成立と展開』

に用いられているのでも分かる通り、有益な資料である。総体として見たとき本書には整理不十分なところがあり、その故の誤りも散見する。この訂正については、『金剛』143号（平7年5月）に載せた田口稿の書評「狂言史の基礎資料―関屋俊彦著『狂言史の基礎的研究』の意義―」を参看されたい。

『室町能楽論考』（中村格著。A5判672頁。4月。わんや書店。八五〇〇円）

本書は能の形成・発展についての歴史的・社会的背景を明らかにしようとしたものと言ってよいであろう。全体は六編に分かたれているが、第一編「能の背景」、第四編「能をめぐる群像」の二章が特にその意図を鮮明にしている。第一編に収められているのは「中世における海運の発達と能―北陸の港湾を舞台とする作品について―」・「「柏崎」成立の背景」・「「実盛」の周辺」の三篇だが、「背景」「周辺」という名付けによってもその意図が知られよう。第四編では幸正能・細川幸隆・金春喜勝と安照などの人々が取り上げられ、考証される。いずれも能楽史上逸することのできない人々であり、活用されるべき研究である。また、「領国政策と神事能」と「能の保護奨励と領民の負担」の二論によって中世末から近世にかけての大名家の保護策の実態を明らかにする。第二編は「能と信仰」と題して「能と信仰―子を尋ぬる物狂いの能―」・「「采女」と春日山木縁起」・「能と念仏奇特」の三篇、第三編は「作品研究」として「室町末期の女能と〝幽玄〟」・「「松風」の変貌」・「謡曲五題」・「「清経」鑑賞」・「謡曲雑感」・「能の詞章における修辞とリズム」の六篇を収める。第五編「書誌・型付」は「「檜垣」の乱拍子について」・「八帖本花伝書の成立」・「八帖本花伝書の諸本について」・「宗随本古型付について」の四篇、ことに八帖本についての調査は充実しており、基礎となるべき報告である。第六篇は書評四点を収める。以上、作品研究においても初めに記した中村氏の意図は一貫している。そういう点から言えば、本書は能の作品研究を行う時、また近世能楽史を叙述する時に参看すべき基礎的文献である、と評価しうるであろう。なお、山木ユリ氏による書評が『言語と文芸』111号（平7年1月）にある。

『アイスキュロスと世阿弥のドラマトゥルギー　ギリシア悲劇と能の比較研究』（M・J・スメサースト著。木曽明子訳。A5判448頁。4月。大阪大学出版会。七七二五円）

以前ニュージーランドのカンタベリ大学教員談話室で雑談していたとき、ギリシャ劇と能とに話が及んだことがあった。その時はこちらに比較して語るほどの知識がなかったのだが、当然そのような関心がギリシャ劇研究者の中にはある筈であり、能の研究者もそれに対応できるほどの知識を身につけておく必要があると感じていた。この書はアイスキュロスの作品の「ペルシアの人々」（多くのギリシャ悲劇と異なり、劇行動を欠くという）と世阿弥の能〈実盛〉とを台本の上で比較するという方法を用いている。世阿弥の能楽論および能に

よって知られる具体的知見がギリシャ劇の理解をどれほどに深め得るかという著者の目的は相当程度達成されているであろう。ひるがえって、能の理解のためにもこのような翻訳が出版されるのは有難いことである。訳者あとがきによれば、訳出にあたっては天野文雄氏の教示があったという。望ましいことであった。なお、藤田隆則氏による書評が『芸能史研究』127号（平成6年10月）にある。

『能の鑑賞講座』（三宅襄著。Ｂ６判349頁。４月。檜書店。二八〇〇円）

雑誌「能」昭和二十二年三月から二十四年十二月までの連載分をまとめたもの。読み難い語に振仮名を付したのは適切な処置である。なお二十五年一月〈30高砂〉以降二十八年八月〈小袖曽我〉までと付録〈関寺小町〉を含め、二・三の二冊として平成9年に一挙刊行された。

『劇人三島由紀夫』（堂本正樹著。Ｂ６判449頁。４月。劇書房。三八〇〇円）

第四章が「近代能楽集」。その成立事情についての情報は貴重である。

『夢幻能』（田代慶一郎著。Ｂ６判318頁。６月。朝日新聞社。一四〇〇円）

夢幻能の定義から始めて、〈井筒〉〈忠度〉を中心にして読み進めている。〈井筒〉前場からワキ僧の性格・前シテの性格を説き、シテの霊力支配下の時空の中でワキの夢幻体験があるという読みは鋭いが、シテは死者の霊によって派遣された分身であるという捉え方は行き過ぎであろう。〈忠度〉の方では、ワキ僧設定の重み、「新勅撰集」まで見通した時の定家を陰の人物として設定していること、「和歌の家に生まれ」という世阿弥の設定など、いずれも説得力がある。本題とはずれるが、「忠度都落」が読み本系にのみ見られる平行盛説話から作られたという説は面白い。

『能の見方・考え方・楽しみ方　大河内俊輝能評集　Ⅱ』（大河内俊輝著。Ａ５判469頁。６月。皆美社。五〇〇〇円）

大河内氏の能・狂言・役者に寄せる愛情が行間から伺われる。現代能楽史のための資料となる。

『能と狂言　生成と展開の諸相』（林和利著。Ｂ６判274頁。７月。世界思想社。二三〇〇円）

第一部能と狂言の歴史、第二部他分野への展開、第三部作品の生成と展開、に分かたれるが、主力は狂言記のさし絵を考察した「手猿楽狂言の演技と舞台」と、すでに定評のある「〈狂言記〉の出版状況」の、いずれも狂言記を扱った二篇であろう。ただし、前者で「鼓座よりも出る」を鼓座すなわち後見座と解さないなど筆の走りが目立つ。叙述は慎重でありたい。

『狂言入間川考』（広沢謙一著。新書判135頁。７月。キャロム。一〇〇〇円）

郷土史家である著者が「狂言入間川を観る会」の事前学習テキストとして著したもので、訳・子供のための現代語訳などを含む。考証の中で、鎌倉街道を通ったとすると「川向」

は入間にならないこと、イルマは歌語「うるま」の転訛であり、入間の里には「逆言葉」はなかったとするのは納得できる。道興の言葉から入間川が逆川であったとの認識があった筈だが、その追求があれば、場所を入間川に取った理由が判明しよう。

『林望が能を読む』（林望著。B6判319頁。7月。青土社。二四〇〇円）

能八十五曲の概説ではない解説。全曲に森田拾史郎氏による舞台写真を付す。平成8年に集英社文庫として刊行される。

『喜多流の成立と展開』（表章著。A5判894頁。8月。平凡社。二〇〇〇〇円）

角川源義賞を受賞した、本年最大の成果である。構成は全七章より成り、第一章「古七大夫研究序説」から、第二章「古七大夫の生涯をめぐる諸問題」、第三章「記録に基づいた古七大夫の経歴」、第四章「古七大夫の芸風と人柄」までが直接に古七大夫にかかわり、第五章「古七大夫の後継者たち」は、その子供・弟子ならびに江戸初期の地方喜多流について述べる。第六章「喜多大夫の歴代―三世以後―」は十六世六平太に至る。第七章「江戸後期以後の喜多座・喜多流」は喜多座の特色と座衆の変動、それから「江戸後期以降の地方の喜多流」を略説する。付載された「北七大夫長能の出演記録集成」は本書の記述を従来の諸説と決定的に異なる斬新なものとした根本資料である。七大夫所演曲索引が付される。これは第四章において七大夫の得意曲を推定する資料となっているが、多演曲必ずしも得意曲と言えないとして、資料を利用するための注意を付記するなど後学のための配慮も欠いていない。次に「喜多家略系図」を載せ、最後に「古七大夫・喜多座・喜多流年表」を置くが、各事項の後に本書の該当頁を注記してあるのは、本書末に付された全体の曲名・書名・人名索引と違った意味で有益である。本書は表氏自身によって総合的な江戸期能楽史研究の序説的なものと位置付けられるが、喜多流に限らず、江戸期の史的な現象について考察しようとした時、これが大きな手がかりとなり、本書の記述が参照すべき規範となる筈である。以上、目次を追ってみたが、北七大夫長能（古七大夫）が江戸初期の能楽を代表する役者であったことから、その事績考証はそのまま江戸初期能楽史を叙述することとなり、その後の喜多流の歴代・座の実態解明と相まって、近世能楽史研究がここにその基礎を据えられたと言えるのである。能勢朝次氏『能楽源流考』が今も利用され続けているのは、その所論とともに、信頼すべき基礎資料の引用があるためなのだが、本書は『能楽源流考』が届かなかった近世資料を確実な形で豊富に引いている。これは本書がそのような原資料へ辿り着くための資料集としても利用できるということである。後学にとってこれほど有り難いことはあるまい。自分が何かを発見したと思ったときも、本書の守備範囲ならば、まずその該当部分を探り、然る後に新説として発表できるだろう。例えば『銕仙』平成九年五月号の天野文雄氏「デビュウ当時の古七大夫―『時慶卿記』文

禄二年十月十四日条の記事をめぐって」などは小論ながら、そのような新見を開陳したものである。なお、天野氏による詳細な書評「畢生の大業―表章著『喜多流の成立と展開』を読む」が『金剛』142号（平7年2月）にある。参看されたい。

『能と唯識』（岡野守也著。Ｂ６判225頁。10月。青土社。二二〇〇円）

興福寺教学の唯識が観阿弥・世阿弥に影響している筈だとの仮説に依って〈采女〉〈江口〉など八曲を唯識の観点から跡付けようとする。黒田俊雄氏の顕密体制論を援用しているのは当然あるべき観点だが、例えば観阿弥における素材提供者と観阿弥自身とを同一化したり、夢幻能のモチーフは唯識から得られたするなど、根本の所で論証に無理がある。むしろ、能の読み方の一つとして、かかる観点がある、という方が説得力があろう。

『観阿弥と世阿弥』（戸井田道三著。文庫判206頁。11月。岩波書店。九〇〇円）

岩波新書719（昭和44年）を同時代ライブラリー206として再録したもの。

『結縁の能　河野由能楽評論集』（河野由著。Ｂ６判315頁。11月。梅里書房。三〇〇〇円）

河野由氏の遺稿集である。

『能楽資料集　二』（竹本幹夫編。Ａ５判637頁。12月。早稲田大学出版部。一八〇〇〇円）

早稲田大学資料影印叢書国書篇37巻。「1風姿花伝抄・2五音三曲并能之心得花伝之ぬき書・3問謡記・4謡之秘書・5曲舞集上・曲舞小諷揃下・6楊貴妃」を収める。解題は1・2竹本幹夫、3・4表きよし、5・6三宅晶子の諸氏。なお、この月報（44）に表章氏「安田文庫の能楽関係資料について」、島津忠夫氏「架蔵本『八帖花伝書』のこと」があり、有益。

『明治の能楽（一）』（倉田喜弘著。Ａ５判498頁。3月。国立能楽堂。二五〇〇円）

明治時代の新聞を中心とし、一部公文書・雑誌も含めて能楽関係の記事を編年体で収集・配列したもの。明治2年から明治8年までと「吾妻能狂言」・「仙助能・照葉狂言」の記事をまとめて引く。索引として「能楽師初出一覧」と「一般人名索引」を付す。『明治の能楽』四冊、『大正の能楽』一冊にまとめられる予定で、年一冊ずつの刊行を予定しているという。近代能楽史のためのすばらしい資料集である。

単行本―共著

『和泉流狂言選　続』（野崎典子・小谷成子編。Ａ５判92頁。5月。和泉書院。一八五四円。）

和泉書院影印叢刊84（21の続刊）として愛知県立大学付属図書館蔵の『和泉流秘書』の一部を複製。

『天理本狂言六義　上』（北川忠彦他校注。Ａ５判404頁。5月。三弥井書店。七八〇〇円）

北川忠彦・関屋俊彦・橋本朝生・永井猛・稲田秀雄の諸氏

と田口、併せて六人の狂言研究者による校注。これ以前に北原保雄・小林賢次両氏による『狂言六義全注』（勉誠社。平3）があるが、それよりも頭注が詳しくなっている。平成7年下巻刊行。

『菊田茂男教授退官記念日本文芸の潮流』（東北大学文学部国文学研究室代表鈴木則郎編。A5判854頁。1月。五八〇〇円）

生田勝彦氏「世阿弥の虚構意識」は『三道』と作品からの考察。原田香織氏「みやびしづかなる位—金春禅竹の美的理念について—」は、みやび「しづか」と空輪との結びつきに注目する。

『日本の音の文化』（小島美子・藤井知昭編。A5判630頁。6月。第一書房。一二〇〇〇円）

高桑いづみ氏「能管と一節切—室町期能楽人の音感—」は世阿弥・禅鳳の伝書から「時の調子」論を引き、音取り用の楽器としての一節切・四穴の機能と退転を述べる。坂本麻実子氏「足利義満と笙」は義満が笙という楽器を将軍の楽器として位置付け、ひいては天皇家の楽器を琵琶から笙へ変えたという。醍醐寺の『枝葉抄』所収の「楽所系図」を読んでいて笙がトップにくるのは何故だろうと思っていたが、このような政治的背景があるとは気付かなかった。能楽について考えるときにも参考になる論であろう。

『総合芸術としての能　西一祥教授追悼』（世阿弥協会。A5判102頁。8月。）

追悼文集的な書。論文としては吉村均氏「『金島書』の構成・試論」が落合博志氏論まで目配りをして序破急構成を考えている。

『能を彩る扇の世界』（椙杜穹才子編。A5判120頁。8月。檜書店。二二〇〇円）

能五流宗家と狂言茂山家所蔵の扇の図録、中村保雄氏解説による各種扇の図録を中心とし、扇の用いられ方、扇の出来るまでなど、楽しく有益な書。

『職人と芸能』（網野善彦編。B6判273頁。12月。吉川弘文館。二二六六円）

はじめに網野氏の概説的序を置き、七氏による各論を収める。いずれも資料を挙げて有益だが、西岡芳文氏「田楽—その起源と機能を探る—」、藤原良章氏「中世芸能の歴史的位置—田楽を中心に—」の二篇が参考になる。

『論集中世の文学散文篇』（久保田淳編。A5判320頁。7月。明治書院。七八〇〇円）

石黒吉次郎氏「祈雨と中世の芸能」は田楽・猿楽・延年の例も引く。山中玲子氏「〈二人静〉の古態—「一人静」の可能性をめぐって」は現行演出では相舞を中心趣向としている〈二人静〉が、他の相舞物との比較から本来相舞はなく、この曲名の初出記録である音阿弥による新工夫だったと推測する。そして詞章の検討から下掛りの古態性を析出し、また、『五音』の〈静〉の次第は〈吉野静〉よりもこれがふさわしいとする。『三道』に見える井阿弥作の〈静〉がどちらかと

いう論争に投じられた大きな一石であると言えよう。また能の詞章と演出との関わりを考えるときにも参考になる。松岡心平氏「能「重衡」を読む」は〈重衡〉を元雅作と想定して〈朝長〉との共通性を指摘しながら読んでいる。現在の時点からの典型的な読みと言えるだろう。橋本朝生氏「中世史劇としての狂言」は狂言の演技・演出の中から「参拝・通夜参籠、オンブ、ツブテ、大髭」を取り上げ、中世絵画史料と歴史学の成果とを結び合わせて、それらが中世の現実を反映していることを指摘している。狂言の舞台が「中世史劇」として見られるという結論は史学に有益であるとともに、夢のある言葉でもある。これは橋本氏『中世史劇としての狂言』(若草書房、平9年)に収められる。

『東海能楽年鑑　平成五年版』(東海能楽研究会編。A4判174頁。10月。能楽の友社出版部。一〇〇〇円)

東海能楽研究会の発足にともない創刊。東海地区の平成五年の番組とその索引、「平成五年東海地区能楽界の動き」が収められ、動向が一覧できる。また、「収集済み番組一覧」として明治時代から平成時代までの番組リストを付載する。後に残る資料集である。

講座類

岩波講座『日本文学と仏教』第二巻「因果」(1月。岩波書店)

村上学氏「夢幻能」。古作の夢幻能の、ワキによる教戒に基づく救済がないという特色から、世阿弥による複式夢幻能の特色を考え、教理に基づき亡者解脱成仏のモチーフを持つ方向に進むことを説く。天台本覚思想がこれをさらに進めることを説いているのは三崎義泉氏の論と併せ見て、示唆的である。また詞章・構成面での構造化を説き、〈桧垣〉〈江口〉を取り上げている。現在の形についての仏教的解釈としては首肯できる。

岩波講座『日本文学と仏教』第五巻「風狂と数寄」(9月。岩波書店)

三崎義泉氏「世阿弥の能楽論—究極位としての妙について—」。天台本覚思想の拡がりを説き、世阿弥能楽論における「妙」との関係を説く。三崎氏が従来から探求して来られた所であり、本年の同氏「世阿弥・禅竹の妙・幽玄と天台の妙」(『天台学報』10月)と重なる。

『講座日本の伝承文学』第一巻「伝承文学とは何か」(12月。三弥井書店)

天野文雄氏「伝承文学と芸能—能楽資料としての逸話」『能楽盛衰記』に見る三つの逸話を考証して能楽史の資料として用いられることを指摘する。能楽史の叙述において伝説・説話化している逸話はともすれば遠ざけられるが、このような考証を加えて用いれば、その面白さも倍増しよう。参考にしたい試みである。

『白居易研究講座』第四巻「日本における受容(散文篇)」(5月。勉誠社)

三村昌義氏「能における白居易の受容」は白居易の影響について先行論をきちんと踏まえたおだやかな論となっている。

論文

昨年の展望にならって、取り上げる論考がまとまって掲載されている学術雑誌・紀要・能楽雑誌の類をその誌紙ごとにまとめて言及し、、その他の分を分野別に記すこととする。

〔掲載誌別の分〕

能楽研究所紀要『**能楽研究**』18号（3月）は91頁を費やして演能記録調査研究グループ（代表表章氏）編「江戸初期能番組七種―「番組要綱」と曲名・演者名索引―（その一）」を載せる。国文学研究資料館の共同研究と科研費とによって、データベース化をめざしてコンピュータ入力作業が進められていたが、その中間報告として、現実にもっとも需要の多い江戸初期の能番組七種（小鼓大倉家古番組・天正慶長元和御能組・古之御能組・江戸初期能組控・御城諸家御能組・寛永雑記・寛文御能組）を整理したものである。次号に載せた「その二」と併せ、別刷りとして頒布された。国文学研究資料館のデータベース、「電子資料館」の「演能データベース」にアクセスして利用することができる。

表章氏「世阿弥の「サルガク＝申楽」説をめぐって―「風姿花伝第四神儀」の成立年代、その他―」は世阿弥伝書の用字法を調査して年代による特徴を抽出し、「第四神儀」の成立は応永二十五年以後の可能性があると結論する。これと関わってこの説は世阿弥自身の発想ではなく、識者から借りたものであることが主張される。田口は『落書和歌七首』を検討したときに「しめ猿楽」の語があり、これを調査してみると「神」を分解して「サルト申文字ニハ日ヨミノサルヲ用」いるという「神儀」と同一の論理が神道書『耀天記』に見えること、『三国伝記』八―6にも「夫レ神ト云ハ申ヲ示スト書」という表現があることから、これは天台系の論理なのだと考えるので、表氏の説に賛同する。西野春雄氏「古今謡曲総覧（下）付古今謡曲総覧曲名索引」は前号の続稿。索引が付いて利用できるようになった。落合博志氏「犬王の時代―『鹿苑院西国下向記』の記事を紹介しつつ―」は神道大系にも翻刻された記事を詳細に検討し、義満愛顧の役者としての犬王随行の意義を鮮明にする。終わりに犬王の事績を検討して観阿弥没後は犬王が一貫して能界の第一人者であったと推定する。これによって従来の説を修正する必要があろう。

楽劇学会紀要『**楽劇学**』1号（3月）。楽劇学会が九三年四月に発足したのは、それ自体で一つの出来事というべきことだが、その設立大会の記録を中心に編集されている。楽劇学の提唱者横道万里雄氏の講演記録「楽劇学会への提言」は舞踊・音楽・演劇の総合的な研究、奏演者と研究者の交流の場として楽劇学会が期待されることを述べる。そして「研究集会　せりふ術の比較研究」として奏演資料とシンポジウムの記録を載せる。現在の舞台・演技の分析的研究がこの学会

の当面の課題であると思われるが、それにしても横道氏の持つ幅広い知識がどのようにして受け継がれるものか、いささかの不安が残ることではある。

『**国文学解釈と鑑賞**』(11月)は特集「能＝その美と作者たち」を組んでいる。天野文雄氏による要を得た「能楽の発生と展開」を巻頭とし、「この人に聞く」として山中玲子氏が聞き手となって「能楽研究と私」というテーマで表章氏の語る、昭和21年以来の能楽研究との関わりが聞書として展開される。香西精氏との出会い、鴻山文庫とのかかわり、思想大系『世阿弥・禅竹』を経て能楽史研究への取り組みなど、学界をリードしてきた表氏の経歴を追うことが、そのまま戦後の能楽研究史を叙述することになっている。今後の抱負として述べられる世阿弥全集本文篇・能楽年表・新謡曲大観などはいずれも共同研究を必要とするものであろうが、是非実現したい企画である。羽田昶氏「夢幻能と現在能」は横道万里雄氏による定義からはじめて、今演じられる現在能が疑似夢幻能化している弊を指摘する。徳江元正氏「中世古注と能」は近来の中世古今注・伊勢注についての研究の拡がりを追い、〈富士山〉・〈姨捨〉を例として中世日本紀・注釈世界の日本紀の存在に及ぶ。「作者研究」として七点、竹本幹夫氏「観阿弥」と表きよし氏「犬王と増阿弥」は現在知られる最新の資料を用いて概説する点有益である。松岡心平氏「却来する世阿弥」は世阿弥の奈良回帰・鬼回帰を説く。三宅晶子氏「観世元雅」は元雅のテーマとしての信仰、新しい舞のかたちについて説く。小田幸子氏「観世信光―『紅葉狩』の作能法―」は一曲の分析によって演出家信光の傾向を指摘する。山木ユリ氏「金春禅竹の美と芸論―「小塩」・「当願暮頭」をめぐって―」は傾向の異なる二曲を挙げて、能楽論と照合する。八嶋正治氏「金春禅鳳」は芸論にしぼる。次に「先行文学の享受」として五点、このテーマは戦後特に発展を遂げた分野であり、前の徳江氏論との関わりもある。大谷節子氏「和歌と能―「綾の大鼓」から「恋重荷」へ―」は恋の苦渋の比喩としての重荷を具現化するという、和歌との関わり方の一例とする。樹下好美氏「『伊勢物語』と能―〈小塩〉の成立と構想―」は〈右近〉の影響を説く。落合博志氏「『源氏物語』と能―〈葵上〉を中心に―」は説草「冬嗣公姫君事」を例として唱導を介しての芸能化の存在を説き、また「破れ車」の解釈から「中世源氏物語」(梗概書)との親縁性に触れる。いずれも注目されつつあるところだが、具体的に資料を引いていて参考になる。徐禎完氏「軍記物語と能―「通盛」「清経」の位置付けを中心に―」は徐氏自身の〈通盛〉論を踏まえ、この二曲は世阿弥の軍体形成過程の作品であるとする。以上四篇はいずれも本文の読みと関わって論旨を展開させている。これは当然あるべき方向であろう。石黒吉次郎氏「漢詩と能」は禅林の句との関わりを整理したもの。次は「作品研究」として二点。小林健二氏「弘法大師教化説話と能〈卒都婆小町〉」は近年紹介の『古今和歌集序秘注』『日本紀』『摂州東成郡阿部王子権現縁起』に見える中世の

小町説話によって〈卒都婆小町〉の背景・解釈に至る。田口稿の「身売り説話と能―〈自然居士〉・〈桜川〉の場合―」は身売りに関する説話世界の拡がりを追ったもの。次に「能楽論研究」として二点。岩崎雅彦氏「世阿弥の能楽論」は表題から考えられるものとは異なる観点で、世阿弥能楽論に見られる詩的表現とその効果というべき内容である。脳についての章は別論とすべきであろう。樹下文隆氏「禅竹の能楽論―五音説をめぐって―」は平成九年樹下氏の解題で出版された禅竹自筆能楽伝書のうち「五音之次第」の紹介と検討がある。付載される「研究のための手引き」は二点。竹本幹夫氏「能楽研究の回顧と展望（一九八五年以降）」は同氏の「能楽研究の三十年」（『中世文学研究の三十年』所収）の続稿。能関係にしぼっているが、研究の現状と問題点の把握に有益である。表きよし氏「主要能楽研究文献目録抄」も同時期の文献を整理する。「抄」だが、これは狂言も含み、一覧できてありがたい。能楽研究が専門化すればするほど、この『解釈と鑑賞』あるいは学燈社の『国文学』のような啓蒙的専門誌がこのような特集を組む意義は大きくなる。学際的な関心を持つ他分野の研究者にとっても、研究の手がかりを得る手段として有益であろう。

『芸能史研究』は本年は124～127号。124号（1月）では藤田隆則氏「能の多人数合唱（同音）の特質―「地」という言葉の用法から―」と中村茂子氏「静岡県森町の舞楽―山名神社の芸能について―」の二点。藤田氏のものは副題の通り「地」の意味と歴史をたどろうとしている。表章氏による「同音」と「地」の定義について「別の機会におこなう」としながら関わりつつ論を進めたため、論前半における推測も確定的には言えないことになっている。後半は新資料も提示されている。なお「メトニミー的用法」などという用語に説明が欲しいのは私だけか。中村氏のものは稚児舞楽と理解されてきた山名神社の芸能が祇園会の芸能の系譜を引くものとする。126号（7月）に北川忠彦氏「田辺の別当のくちなわ太刀」がある。四月三日に逝去された北川氏の最後の論ということになる。狂言〈成上り〉に見える成句の背景となる伝説の拡がりを説く。続いて島津忠夫氏による「追悼・北川忠彦氏」がある。北川氏の逝去は共著『天理本狂言六義』下の氏による原稿調整がほぼ終わった時であり、あまりにも急なことであった。123号から引き続く「横山杣人年譜」は126号まで。

『観世』の特集は本年は〈西行桜〉と〈呉服〉の二つであった。五月号に三宅晶子氏の「作品研究〈西行桜〉」があり、「申楽談儀」の〈西行〉は〈西行桜〉であること、老体の舞楽的な物まねの舞があったことを推測している。これは六月号の山中玲子氏「『西行桜』演出の歴史」に古い演出資料を引いて確認されるものと併せみるべきであろう。片山慶次郎氏と天野文雄氏による座談会は六月号。七月号には小林英一氏「作品研究〈呉服〉」があり、呉服の里は西宮市津戸地域であり、能成立後に池田の二社と結び付けられたとしている。九月号に岩崎雅彦氏「『呉服』演出の歴史」があり、

後は相舞ではなく二人による物まねだったとするのは面白い。片山氏と脇田春子氏による座談会は十二月号。味方健氏「能作史序説Ⅲ　修羅の系譜①～⑤」（4・5・10～12月）は実技者としての分析に特色がある。金井清光氏「中世芸能清泉抄」（2・8月）は「出来」を「シュッライ」と読むこと、「駒にもつの」は祝言の文句でてんぽ物語に語られていた（石井正己氏説）こと、「呉服」の読み、〈実盛〉の背景としての時宗の供養について、を載せる。

『**宝生**』（1月～5月・8月）は西野春雄氏「佚曲再検」が酒田市立光丘図書館蔵「荘内謡曲」五番の紹介。〈大地踏〉（1月）・〈十五里原〉（2月）・〈玉松〉（3月）・〈五所王子〉（4月）・〈羽黒山〉（5月）と〈祇樹園〉（8月）の紹介。12月号には西野氏「文の効果―「敷地物狂」の場合―」がある。また10月号の村瀬和子氏「鬼の醜草―蕪村と大江山―」は蕪村の句をめぐるエッセイ。

『**銕仙**』の「研究十二月往来」は岩崎雅彦氏「天保二年の遊女能」（1月）、田口「〈右流左止〉・〈いぐゐ〉の難語―天理本狂言六義の注から―」（2月）、永井猛氏「宮島狂言師と宇佐神能」（3月）、松岡心平氏「世阿弥と奈良」（4月）、高桑いづみ氏「能以前の鼓胴」（5月）、小田幸子氏「『楊貴妃、唐織本なり』」（6月）、西村聡氏「妄執の瞋恚―修羅物における〈八島〉の位置―」（7月）、樹下好美氏「〈邯鄲〉小考」（9月）、石井倫子氏「番外曲〈泣不動〉覚書」（10月）、竹本幹夫氏「『申楽談儀』所引不明謡小考―「とりわき神風や・・」と〈融通鞍馬〉」（11月）の九点。新発見が多いが、中でも竹本氏論は「申楽談儀」第十段の典拠不明の詞章が〈融通鞍馬〉のクセ中のものであることを証し、融通念仏盛行に基づく宣伝的作品であることを説いている。今後の展開が期待される発見であった。このことについては表章氏「『申楽談儀』第十条引用曲に見る研究の進展」（『銕仙』「研究十二月往来」平7年1月）にその位置付けがある。

『**能楽タイムズ**』の「汲水閑話」は73から82まで。徳江元正氏分が「中世日本紀をよむ―能・曲舞・詠―」（3月）、「「通小町」補注―小町寺の略縁起―」（5月）、「「船弁慶」の一句」（7月）、「チュウタという名」（9月）、「生きたる母をうち捨てて―備後の身売り能―」（11月）の五篇、田口分が「〈巻絹〉と稚児の孝行―『沙石集』と『因縁集』―」（1月）、「元禄十五年狂言稽古事情―大蔵八右衛門の通達から―」（4月）、「狂言〈横座〉の周辺」（6月）、「閨の内見め―〈錦木〉異解―」（8月）、「乙卯天下一統干支祝能―将軍吉宗の新儀―」（12月）の五篇。10月分は八月十九日逝去された恩師池田廣司先生の追悼文とした。

『**武蔵野日本文学**』3号（3月）は能・狂言特集である。二頁程度の短文が多いが、次に挙げる三篇はまとまっている。

馬場あき子氏「本歌取りされた能」は講演記録で、能を本歌・本説として詠まれた句・歌を引いている。馬場氏自身の短歌についても触れていて面白い。土屋増一・小林責両氏「佐渡鷺流の命脈を保つ」は亡くなられた土屋氏からの聞書

の「土屋増一芸話」を収める。近代佐渡狂言の証言として貴重。羽田昶氏「土岐善麿と能」はその新作能について資料を引いて整理している。喜多実との関わりがよく分かる。

『民俗芸能研究』19号（5月）は後藤淑氏の資料紹介「伊勢一色能の翁舞」がその全容を伝えている。岩田勝氏「寛文四年能本にみる神楽の能の意図と構成」は氏の遺稿とのことだが、広島県比婆郡東城町の荒神神楽の能本を三類型に分類しての充実した分析である。

〔資料紹介・資料研究・能楽史研究〕

広木一人氏「正徹本『徒然草』第一六段「ひさ王宮一」—猿楽者と琵琶法師」（『青山学院大学文学部紀要』35、1月）は正徹本・常縁本などの徒然草古本に見える「ひさ王宮一」について、従来は烏丸本に見える「琵琶和琴」の誤写と片付けられていたが、「ひさ王」は金春初代「毘沙王権守」、「宮一」は琵琶法師（誤写があれば「成一」）と推定し、「兼好が当時草創期の熱気の中にあったであろう二種の芸能の担い手に関心を示した」とする。これは妥当な推論であろう。

天野文雄氏「「角坊」箚記—宮内庁書陵部蔵「角坊文書」をめぐって」（上田女子短大『学海』3月）は『甫庵太閤記』の記述を裏付ける確実な史料の翻刻と考証。天野氏著『能に憑かれた権力者　秀吉能楽愛好記』（平9年。講談社）に生かされる。

辻宏一氏「御能御囃子留（一）—翻刻と研究—」（『岐阜市立女子短大研究紀要』43輯、3月）は貴重な能番組の翻刻だが、（一）が享保十四年八月までは完成はいつになるのであろう。

伊藤茂氏「能楽伝承制度論」（神戸学院大学『人文学部紀要』9号、10月）は家元制度と世襲について論じ、技芸の伝承という主要側面が曖昧になった世襲制度は家の継承という側面へ傾斜してしまうことを指摘する。世襲制度に代わる新しい伝承のあり方への期待を籠めた論である。

〔作品研究・作者研究〕

千葉知樹氏「「通盛」試論—シテ・ツレの成仏へ向けて」（『金沢大学国語国文』2月）は前シテが「憂き業」に従事することを「亡霊が苦しんでいる事の象徴として読む」など、詞章をよく読み込んでいる。ただし、小宰相の成仏を後ツレの「さも艶ける」姿から読み取るのは無理だろう。むしろ井阿弥の原作を世阿弥が「切り除け」る間に、成仏が詞章上は説かれなくなってしまったと想像する方が自然であろう。これは前引の徐禎完氏論がかかわる。

山田光枝氏「『通小町』—人間の劇創造への契機」（共立女子大学大学院文芸学研究科『Kyoritu Review』22号、2月）は「印象の追跡」という発想が論文としての確実な論述を妨げ、自己の先入観へ論旨を引き付けることになっている。同氏「『自然居士』創造への道筋—観阿弥の時期区分を探る視点から」（『共立女子大学文芸学部紀要』2月）は従来の

研究を整理したもの。

王冬蘭氏「能「楊貴妃」の典拠―『長恨歌』『長恨歌序』『長恨歌伝』の伝本をめぐって―」(『百舌鳥国文』12号、3月)は典拠が『長恨歌序』正安二年写本系であることを、詞章の比較により考証する。王氏には「能における元曲影響説―その経緯と背景」(『帝塚山大学教養学部紀要』39輯、10月)もあり、元曲影響説を吟味・否定している。妥当な見解である。

金忠永氏「『砧』考―シテ像造型における現在能・夢幻能形式の継承・止揚の方向―」(『文学研究論集』11号、3月)は〈砧〉詞章の分析を通して「却来」性を捉えようとしている。シテの救済について「おのれの想念を超えた救済の構造によって救われる」とするなど、よく読み込んでいるが、例えば夕霧の言動について諸本の相異を無視した意見を重用するなどは問題がある。過去の業績は必ずしもテキストの検討をきちんとしたものばかりではない。ここは慎重でありたいところである。

堤康夫氏「廃曲「明智討」に関する一考察―『伊勢物語』との関係を中心として―」(『昭和学院国語国文』3月)は秀吉への配慮を説くところは良いが、道行の地名は『伊勢』との関わりがなくても成立する。推論は強引に過ぎよう。

津村秀樹氏「早歌の表現と謡曲の詞章―謡曲の文芸的基盤―」(『国文学攷』142号、4月)は詞章の比較。〈砧〉は永済注を共通典拠とする可能性を考えるべきであろう。

石井倫子氏「〈黒川〉の周辺―斬り組ミ霊験能の視点から―」(『中世文学』39号、6月)は石井氏が定義する「斬り組ミ霊験能」の例曲を検討し、禅鳳の〈黒川〉は信光の〈高祖〉を下敷として作られ、泰山府君祭という視覚的要素を重視した禅鳳的作品であるとする。斬り組ミ霊験能一般の説明は別に詳細に論ずべきだろう。

田中貴子氏「女神考―謡曲「三輪」における神の性―」(『日本の美学』21号、7月)は注釈書・神道説を引いて、〈三輪〉〈葛城〉における神の人間的苦悩が女性という性と結び付いて女神の姿を取るとする。

菅野覚明氏「言の葉の栄え―『高砂』的世界の論理―」(『日本文学』7月)は和歌・治世の一体性が掛詞(和歌の重層的表現力)によって表現されているとする。作品論というより〈高砂〉を手がかりとして、その論理の存在を探ろうとする試みと言えよう。

落合博志氏「『徒然草』に関する考察二題―第六十七段・第百七十九段―」(『法政大学教養部紀要』90号、2月)は実方の伝説から能〈実方〉〈水無月祓〉などに及ぶ。

松崎仁氏「天神伝説と演劇」(梅光女学院大学『日本文学研究』29号、11月)は小田幸子氏論を引きながら、近世への展開を探る。

〔能楽論研究〕

富山泰雄氏「語りの構造―「弓八幡」と「高砂」の祝言」

（1）～（8）（『橘香』4～8、10～12月）は「三道」の能作論を具体的に作品の構造から読み取ろうとする。二曲にしぼった理由を言わないこと（後に反省として吉村均氏論によったらしいことが示されるが）、また先行論引用方法の不十分さ（注において論の存在を指示するだけで文章を引かないこと）に不満が残る。

〔演出研究〕

藍原清巳氏「能の「位」と囃子の演奏―「序破急」「緩急」と大鼓「頭組」の手組―」（『新潟大学国語国文学会誌』36号、6月）は曲の位取りと大鼓の演奏について分析する。

〔狂言関係〕

平成6年は狂言研究の先達が相次いで逝去された年であった。四月北川忠彦氏・八月池田廣司氏、古川久氏・九月安藤常次郎氏である。ことに北川・池田両氏は旺盛な研究活動を展開されている最中の、あまりにも急な訃報であった。あらためてご冥福を祈りたい。

柳田征司氏「虎明本狂言詞章における語形が注目される語詞の若干について」（『愛媛大学教育学部紀要』第Ⅱ部人文・社会科学、2月）は読解に資する語注。関連論文が引かれていることが有り難い。

金井清光氏「狂言の娘―「おごう」と「いちゃ」」（『日本歌謡研究』3月）は語注。金井氏には「『天正狂言本』「田うへ」と気比神宮田植え歌」（『日本歌謡研究』12月）もあり、両者とも金井氏『能・狂言の新論考』（平8年、新典社）に収められている。

飯塚恵理人氏「「翻刻筑波大学附属図書館所蔵　西村本『間之本』（A冊）」（『椙山国文学』18号、3月）は貞享松井本・鞍貫本と並ぶ間狂言の善本の翻刻（B冊まで連載されて平9年3月に完了）。

網本尚子氏「狂言「鬮罪人」研究」（『人間文化研究年報』17号、3月）は山の趣向について。全体としては試論的な仮説が多い。もう少し確実な裏付けが欲しい。

山中玲子氏「狂言〈川上〉の妻」（『東京大学留学生センター紀要』4号、3月）は狂言各流の台本を系統的に引いて妻の性格を論じているが、各流やや並列的。形成以前の因縁譚における妻の位置を考えると、諸台本間の前後関係が見えてくる筈である。

安田徳子氏「「狂言記」所収狂言の吟味―登場人物の表記をめぐって―」（『聖徳学園岐阜教育大学国語国文学』3月）は狂言記正篇の役名表記から、その後の三種の狂言記は形式を踏襲したが所収狂言の性格は異なるとする。

田口和夫「『おくのほそ道』における曽良の位置―〈殺生石〉のアイ狂言から―」（大修館『国語教室』、6月）は曽良がアイ能力役を勤めていることの指摘。（田口著『能・狂言研究―中世文芸論考―』（三弥井書店、平9年）に収める。

安野真幸氏「『相良氏法度』の研究（二）―「スッパ・

ラッパ」考―」(弘前大学教養部『文化紀要』40、9月)は法制史料を中世の史実によって解釈する。スッパを「街道や宿や市を活躍の舞台とし、流通・金融界にかかわりを持つ職能民」とする定義や「山の民」とも関係があるとする視点は、橋本朝生氏が追求している狂言の「史劇」性とも関わるところで大いに参考になる。

稲田秀雄氏「狂言「夷毘沙門」考」(『同志社国文学』11月)は天正狂言本〈高札聟〉の演出推定に能郷猿楽狂言を傍証として挙げ、福神の聟取りモチーフと『法華経直談鈔』所収四天王本地譚との共通性を指摘、夷三郎の性格に説き及ぶ。注釈・直談世界の説話理解と狂言形成との関わりに注目することは今後の研究に資するところ大であろう。稲田氏には「滑稽な冠者たち―狂言」(『日本文学の男性像』世界思想社、5月)もあり、概説的だが、〈末広がり〉〈栗焼〉〈武悪〉の下人の芸能について考察している。